

令和3年度中学校武道授業(少林寺拳法)指導法研究事業



令和3年度中学校武道授業(少林寺拳法)指導法研究事業〔主催＝日本武道館・少林寺拳法連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁〕は、令和3年6月26日(土)・27日(日)に全国の研究者6名、研究協力者3名、連盟本部事務局1名の計10名が参加して、オンライン会議システムにより実施された。

研究事業は9月に開催予定の「第9回全国少林寺拳法指導者研修会」に向け、武道授業における課題を中心に発表と研究協議が行われた。

開講式では、吉川英夫日本武道館理事・事務局長が挨拶を述べた後、研究者の代表として高坂正治国際武道大学教授が挨拶を述べた。

開講式終了後、笠岡市立笠岡西中学校保健体育科講師の妹尾康代研究者が、授業に少林寺拳法を導入してから、生徒たちが協力して楽しく授業を進め、最終的に演武を披露していくまでの学びの過程が発表された。

次に、笠岡市立真鍋小学校校長の小井寿史研究者から、令和3年度より全面実施となった新学習指導要領について、注意すべき変更点や課題の説明のほか、どのようにICTを活用して指導と評価を一体化させていけばよいか発表があった。

富士見丘中学校・高等学校教諭の中島正樹研究者からは、短時間で効率的な授業を行うためにはどうしたらよいか、課題解決型指導を展開していくにはどのような工夫が必要かという内容の発表があった。

午後は、少林寺拳法連盟振興普及部振興課の秋元宏介氏から武道授業の構造化について発表があった。金光学園中学・高等学校教頭補佐の安田智幸研究者からは、コーチングを活用した授業の発表があった。ここでは生徒たち自身に可能性・自信を自覚させ、挑戦させるための指導法が発表された。

次に、愛媛県教職員支部支部長の合田雅彦研究者から、少林寺拳法のエッセンスの活用法として、楽しさ・意欲・向上心の源を探り、技術や教えに活用できる形にするにはどのようにしたらよいかという内容が発表された。

初日の最後は、研究者たちによる自由討議が行われ、「少林寺拳法を教えるのではなく、少林寺拳法を各種活動に活かす」、「楽しさを伝えるには」といった内容の議論がなされた。

2日目は、9月に開催される全国研修会の詳細を確認後、開講式を行い、全日程を終了した。